

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 ベルンハルト・シュリンク 『朗読者』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 82 回のツイキャス読書会の課題図書は、ベルンハルト・シュリンクの『朗読者』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「朗読者を読んで」

この物語は私に二つのことを教えてくれた。

ひとつは、文盲という人が世の中には存在していて社会生活を営む事が大変であること。

もうひとつは、ナチスについての映画や物語を怖いという理由で避けてきた私に考えるきっかけを与えてくれたことだ。

ハンナは孤独に生きてきた。文盲であることが彼女の人生を支配し左右していった。

もし彼女が文盲であることを他者に打ち明ける人生を歩んで周りに信頼できる人間関係を作っていたら彼女の人生は違うものになったのではないかと思った。

物語前半はハンナとミハエルの純愛物語のように思えたが、ピュアなミハエルの心の揺れ動きに対してハンナはどこか冷ややかで人間みのない人物像にうつった。

とくに二人の小旅行でミハエルがメモを残して出ていった時にハンナが怒って鞭をうつところは、どこか歪んだ異常性を感じた。ミハエルはペットと同じだと思った。これは愛と呼べるのだろうか？

ハンナは罪となって独房に入ってしまう。

10年間ハンナに朗読テープを送り続けたミハエルに性欲を超えた人間愛を私は感じた。

にもかかわらず彼女はなぜ自殺したのだろうか？

彼女は決まった規律の中でしか生きられないのだと思う。

独房からでられる自由は彼女にとってはよるべないものだったのかもしれない。

最後に私には疑問が残った。

今の価値観で過去にさかのぼり、人が人をさばくなんてできるのだろうか？

(おわり)

「ナチスの忘れ形見」

戦争に始まりはあっても、終わりはない。戦争はそれを経験した人の中で永遠に繰り返される。ナチスがハンナに植え込んだ戦争の種は厳しい規律の取れた生活ぶりだった。テキパキと物事を運んでゆくハンナの動物的な敏捷さにミヒャエルは魅力を感じたかもしれない。

しかし彼女の完璧主義な仕事ぶりは自分が文盲であることを気付かれないために形作ったカモフラージュだった。今まで冷然としていた彼女がミヒャエルの残したメッセージを見て正気を失い彼をベルトで殴るというシーンはそれを裏付ける。

でも彼女は分からなかった、文盲であることを隠すうちに自分が人情や正義を見極める目を失っていたことを。ナチスの親衛隊に入ることが何を意味するのか、収容所の少女やミヒャエルを本を読む機会同然に扱って見捨てることの何が悪いのか彼女は気づかなかった。

一応恋物語の形式を取っている作品ではあるが、私はそう読めなかった。ミヒャエルはハンナのナチス親衛隊の機敏さに憧れ、ハンナは自分の制御下に置ける可愛い坊やが欲しかっただけではなかったかと思われたからだ。去勢された西ドイツの象徴であるミヒャエルと強かったナチスドイツの忘れ形見であるハンナ。その二つの食い違いと葛藤を無理やり和解させようとしている気がしてならない。

第二次世界大戦の敗戦国であるドイツと日本では「ハンナ」を懐かしむ人がどんどん増えている。確かにそれは魅力的だ。強い国、何かを支配するという優越感を嫌う人はいないだろう。しかし我々が求めるべきものは力ではなく、他人の苦痛を理解し、配慮する優しさ、真の意味のリテラシーである。それが我々の中に残っている戦争を打ち勝つ鍵になると思う。

(おわり)

スミカズさんの主宰する 炭山 韓国読書会のブログとツイキャスです。

ブログ <https://ameblo.jp/shimogashiwa>

ツイキャス <https://ssl.twitcasting.tv/c:nindaranna>

『朗読者』感想文

ベルンハルト・シュリンクという作家の作品は初めて読みました。

読んでみると、主人公のミヒヤエルの姿に昔の自分に当てはまる描写があったり(ハンナの帰りを階段に座って待っている描写とか)して、自分の初体験や、周囲の人に僕ら実は付き合ってますと言えなかった過去を思い出しながら読ませてもらいました。

文体的には、とてもスラスラと読みやすいのだけれど、作中の人物の心の動きが激しいので、詳しくはわからないけれど、ハンナ視点での朗読者があったら読みたいなと思いました。

ハンナの文盲は、文字が読めないイコール教育を受けられない貧しい生活をしていたのだろうけれど、刑務所でミヒヤエルの朗読したテープで文字を勉強する姿勢には感動しました。

ミヒヤエルにも、ましてや法廷でも文字が読めないと言うのは、絶対に言えないプライドがあったのでしょうか。

前に宮澤さんの音声でキルケゴールの死に至る病を聴いた時、誰にも言えないことこそが本当の絶望だと聴いたので、ハンナは文盲ということに対して(いや、それ以外のことに)絶望して生きていたのかもしれませんが。

自分の罪を償うようにホロコースト関連書籍を取り寄せ、自分が一体何に関わっていたのかを知りさらに絶望したのだと思うと、ハンナの人生は楽では無い気がしました。

ミヒヤエルがなかなか、自分の過去と向き合えず、ハンナと直接的に会わないのですが、ハンナの出所前に会えたり、電話での短い会話が出来て良かったと思いました。

この主人公のミヒヤエルは、ハンナがいなくなってから、実はずっとロストハンナ病(勝手に命名)にかかっているようで、ゲルトルートと夫婦関係になっても破綻してしまうのは、国境の南、太陽の西の主人公のロスト島本さんと同じ病状とかなり似ている気がしました。

この朗読者という作品は、一回読んだだけでは、わからないところが多く、訳者自身が再読を勧めていますので、また再読したいと思いました。

朗読者の映画版「愛を読むひと」の評判は知りませんが早速、借りて来ました。

今回の読書会の音声や過去の宮澤さんの音声などを聴いて、朗読者ワールドを深く味わいたいなと思いました。

(おわり)

「言語と世界」

聖書に「初めにロゴスありき」とあるが、神なき時代に客観的世界を支えるのは、ロゴスつまり、普遍的言語＝文字である。

神も文字も持たないハンナは、常に現在的主観的世界の中にいた。

最初の喧嘩でのハンナの台詞「あんたがやることはあんたの用事であって、あたしの用事じゃない。」また、法廷での台詞「あなただったらどうしましたか？」などは彼女のそうした思考をよく表している。

また彼女は「じゃあ私は…しないほうが…」と法廷で自問自答するが、これも彼女の思考が常に現在のであったことを示している。

ハンナにとって唯一の社会は、看守としての経験だった。

ただしここで得た社会性は極めて限定的なものであった。

法廷で「私たちは」というように、それは目的を同じくする限りでの社会性であり、主観的世界を出るものではなかった。

とはいえ彼女にとってほとんど唯一の社会性の基盤である看守生活は、彼女の自由と尊厳の唯一の拠り所だった。

自由と尊厳とはそれ自体個人的なものであるが、個人を評価する他所を必要とする。

ハンナにとって看守の経験で得たものは彼女の社会性とプライドのすべてだった。

文字を獲得したハンナは、ついに客観的な世界に足を踏み入れる。

話し言葉は常に「誰か」の言葉であるが、書かれた文字はその時々で誰の言葉にもなり得る。

そこでは自分も他者も対等となる。

彼女は読むことを覚え強制収容所に関する本を読むことで、はじめて看守としての自分を客観的に理解した。

そして同時に、囚人側の気持ちも。

ハンナはこれまでの規律を捨てる。

それは、看守としての自分の否定だった。

文字を手に入れた彼女は、そこではじめて自由を手に入れたと感じたかもしれない。

だが、そのことはこれまでの自分自身と尊厳の否定でもあった。

客観的世界を知った彼女には、自殺のほかには選択肢はなかった。

ハンナは気づいた。

裁判員らは、悪しき犯罪を主導する看守のリーダーとして自分が断罪され罪を追うことを望んでいたことに。

死んでいったユダヤ人たちも生き延びた人たちも、自分が堂々と生きていくことを許さないだろうことに。

そして、ミハエルが会いにきたのは、看守で文盲の自分だったことに。

幸福は自由や尊厳とは確かに異なる。自由や尊厳のために人は幸福に反する行動をとることがある。

そして反対に、自由や尊厳を守ることが幸福をもたらさないことがあるのだ。

(おわり)

『ハンナの気持ち』

今回初めて読んで、色々気になることがあったのですが、一番は、ハンナはどのように自殺してしまったのか？ という事です。

ミハエルは優しい人だと思うし、昔二人で会っていたときは愛もあったと思うけど、長い時を経てミハエルが好きなのは昔のハンナで今のハンナではないことが分かったからなのかなと最初、思いました。

でも、ミハエルとハンナは年が離れすぎているし、ハンナの背負っている罪を考えると、昔のように愛し合うのは無理な事だとハンナも分かっていたと思うし、もしミハエルがハンナをずっと好きでいてくれたら嬉しいけど、ミハエルを不幸にしてしまうというふうに考えていたのかもしれないなと思いました。

昔は綺麗にしていたハンナも老人の匂いがするようになって、それは長い間収容されて単に年をとったからだけかもしれないけど、もう昔の自分ではないという事をミハエルに分からせる為だったのかなと思いました。

ミハエルも、ハンナの事は過去の事だとしながらもきっとこれからもハンナの為に力になってあげたと思うけどハンナはそれを望まなかったのかな？ とも思いました。

もし、私がハンナなら迷惑かけたくないなって思うし、自分と関わりのない別の世界で生きてほしいと思います。

でも、読めば読むほどハンナの本当の気持ちはどうなのか分からなくなりました。

ハンナは、自殺をいつ決意したのかな？ 自殺をしないでもいい方法はなかったのかな？ と思い悩みました。

(おわり)

Myself is not Yourself

「あなたの視力ってどれくらいなんですか？へえ～、それって私の裸眼と同じくらいですね～」 「全然そんな風に見えな～い」

私のように見えている、弱視と言われる視覚障害者なら一度は言われた事のある、いわゆる「あるあるネタ」である。

他にも

「見えないことを言い訳にしている」

と決めつけられ悔しい思いをした経験を持つ人もいるだろう。

「障害者としてかわいそうと思われたくない」と宣言して活動している人もいる。

世の中に合わせられないから障害を持つことは恥ずかしい事だとか、誰も自分を分かってくれないと思った事が私はあるし、ハンナもその1人に映った。

けれどアドラー心理学ではないが、自分の事を他人は分かってくれるものだろうか？ 同じ釜の飯を食った仲間や同僚、夫婦、血を分け合った親兄弟でさえ疑問符が付くし、私を誰も理解してくれないと嘆く人でも、誰かが自分自身とは違う見方や価値感でアドバイスやら判断をしたらどうだろうか？

押し付けはやめて！ と思うことがあるだろう。

障害があってもなくても多くの人が自分と他人や、社会のルールの差異で葛藤している事だろう。

周りを拒絶したり、誰かを自分の世界に引き摺りこんだり、無理をして他人やルールに合わせて疲れたり、処世術も様々だろう。

誰も私を理解してくれない。

なら自分は自分のことを理解しているか？ 自分の声や思いに耳を傾けているか？

独房の中でなくても、社会の中で孤独を感じているなら、今、世俗で生きる自分の事を諦めずに大切に上げてあげべきだと思う。世界に自分以外誰もいなくとも、自分はそこにいるはずだ。

自分自身の存在すら失っていいのか？ 自分の寄り添は自己であり、自分の主人は自己であるはずではないのか。

自分自身を愛せないと誰かを愛せはしない。

体の快楽や愛されたいと言う自分本位の欲求ではなく、エーリッヒフロムの愛するということに出て来たような「命を注ぐ」ようにテープに朗読を吹き込んだミヒヤエル に尊敬の念を抱くけれど、字を読み書きできるようになったハンナからしたらミヒヤエルから手紙が欲しかったのかな？

自分の事を理解してもらうのが難しいように、相手の気持ちを理解するのも難しい。

だからこそ相手の尊厳を認め、声に耳を傾け、寄り添う事を忙しくとも忘れないようにしないと、そんな感想を持ちました。（おわり）

希望もなく、絶望もなく、ふたりは穴に落ちていた。

最初に出会ってから半年くらいの愛人関係。ある日失踪してしまったハンナの行動の理由をいくら考えてみても当時のミヒヤエルには理解できなかった。人を愛することができなくなって陥る諦めと孤独と寂しさ。その空虚感を埋めることができずに彼は穴に落ちた。法廷で偶然再会した被告者ハンナに、過去に犯したナチス親衛隊での罪と、彼女が文盲だったことを知り、これから先自分がすべきことにミヒヤエルは悩む。

「わたしたちは幸福について話しているじゃなくて、自由と尊厳の話をしているんだよ」
という哲学者の父の言葉に従って、できることとできないことに煩悶し、そしてすべきことに辿りつく。

ミヒヤエルから送られてくる朗読テープのおかげで、ハンナは文字を覚えた。文盲というトラウマを克服し、それはミヒヤエルにとっても喜ばしいことだった。だけれど、元のように愛を育む関係には戻れない。時間の経過のせいでもあるだろうし、ミヒヤエル自身の中に蓄積したハンナに対するかすかな恨みのような憎しみ感情のせいだろうか。サドマゾ的な主従関係を強いられたゆがんだ恋愛関係のせいだろうか。

ハンナには決定的に欠落しているものがあると思う。文盲の克服より以前に、強情をやめること、知的好奇心を持つこと、一人の独立した男性と対峙し深く愛すること、そして神を信じること。育った環境の説明はないが、親の愛情をあまり受けられずに孤独のまま大人になってしまった印象。どれが正解なのかはまだわからない。どれもが必要なのかも。

ハンナは、刑務所の中で戦争中迫害された側の告白の本を読み、死者との対話をしながら、人生において対話すべき生きている者を心の底から求めていたように思う。世界で唯一つながりのあったミヒヤエルからの手紙を待ち続けた。だが、18年ぶりに再会したとき、彼のほうですでに彼女への気持ちがふつつり切れたので、それを表情から読み取ったハンナは生きることへの執着を失う。

ミヒヤエルは本を朗読をすることで、ハンナに目を開いてもらいたかったが、できずに終わった。15歳の少年が賢明に愛を読んでいく気持ちとは変わってしまっていたけれど、それでもどこかに彼女に対する愛情と献身したい気持ちがあったはずだ。穴の底に落ちきったミヒヤエルはこのあとの人生でどうなってしまうんだろう。井戸の底へそっと梯子を下ろす人が現れてくれるといいけれど。

(おわり)

『感覚麻痺』

自分が会って知っているハンナと強制収容所の看守としてのハンナ。

それが一人の人物であることの整合性をつけたくて、ミハエルは強制収容所に足を踏み入れて想像を巡らせた。父に考えを乞うたし、裁判官のところに足も運んだ。

しかしミハエルの心を支配し続けていたことは、このことだともう。

「僕の裏切りは、彼女を傷つけたのか？」

「いったい彼女は自分を愛してくれていたのか？」

ハンナから来た手紙に返事を書かなかったミハエルに、私はミハエルの父が息子に取った態度との共通性を感じた。父として子どもを救えないことを残念に思うと言う父の言葉を半ば信じ半ば信じられない。果たして父は本当にそう思っていたのか、それとも考えることをやめて安きに流れただけなのか。その答えは決して父から直接返ってくることはなかったし、知りようもなかった。

ハンナがミハエルに手紙を書き続け、返事を待っていた時の心境も同じだったのかも知れない。ミハエルがテープを送ってくれるのはハンナに思いを巡らせてくれているからなのか、それともただ彼自身の道理を果たそうとしている行為なのか。

私は、二人とも、同じことを探求したくて、別々のルートで旅をしているようなものだと感じた。惑星が決して交わらない軌道のように。旅をしても永遠に終わりに辿り着けないループを前に、二人は感覚麻痺で補うしかなかった。ミハエルがハンナの裁判の経験を一緒に追いながら、その結果を感覚麻痺でやりすごして人と距離を置いたように。ハンナが他の囚人とは別の高みを求めて現世を離れ肥満して匂うようになったように。

ミハエルは先行した法律学について、“ある目的に向かって発展はしていくが、多種多様な揺さぶりや混乱、幻惑などを経てたどり着く先は、結局またもとの振り出し地点なのだ。そして、そこに戻ったかと思うと、またあらためて出発しなくてははいけない”と表現した。

ハンナの死の先に、ミハエルの再出発地点は見つかるのだろうか。

小説を最後まで読み、ミハエルがハンナの墓参りをしたところで私は泣いた。私の感覚は、初読のときよりさらに敏感になったみたいだ。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 ぼくは解放されたかった 』

恋は、自分の心に恋人の形をした空洞ができることだと思う。その金型が強固なうちは、他の人はハマれない。その空洞を埋めるには、その人でなくてはならないからこそ、勝手に囚われていく。自ら、囚人になるのだ。

ミハエルとハンナもそんな恋だった。お互いに、相手の形をした金型が、生涯壊れることがなかった。そのことが、皮肉にも悲劇的なラストを導いてしまったような気がした。

そんな二人にも、徐々に小さなすれ違いが起こってくる。その根本原因が何なのか、ミハエルには想像だにできない。そんな中、ハンナは姿を消す。突然、ハンナの囚人ではなくなったミハエルだが、時間薬が必要だった。その後、結婚するけれど、うまくいかない。心の空洞は、まだハンナの形をしているのだった。

しかし、ナチス時代の強制収容所裁判の法廷で、二人は再会してしまう。でも、ミハエルは冷静だった。恋の囚われから逃れるには、金型が壊れない限り「死」のような不可抗力が必要だが、彼女が被告である限り近づけない。ある意味、ほっとしていたのかもしれない。でも、その法廷で彼女の秘密、罪が浮き彫りになり、人を理解するということの矛盾と危うさに打ちのめされる。彼女が罪を背負ってでも守りたかったプライドがミハエルには理解できない。ただ、裁判の中で、彼女の人生が「文盲」を隠して生きることに占められ、愛し合った自分の前からも消えたことを思うと何もできなかった。ただ、彼女がなぜ「制服」に見える服を着ていたのか、ミハエルには理解できただろうか。法廷でミハエルを見つけた瞬間から、彼女がより一層、武装したことを。彼女の心の空洞も、まだミハエルの形のままだった。

ハンナが収監された後、妻と過ごす時間でさえ、ハンナと比べてしまう。囚われることに疲れたミハエルは、ハンナからの解放を願う。その為、ハンナと向き合うことをしない。必死で字を覚えたハンナに必要なものは、ミハエルの手紙だったというのに、朗読テープを送り続ける。住居や職は手配するが、ハンナが本当に求めているものを与えることができなかった。

ハンナが、なぜ自死したのか。武装をする必要がなくなったと共に、ミハエルを解放してあげたかったのも理由のひとつかもしれない。ただ、ミハエルにはなす術がない。自らが「自由」になるための『朗読者』の執筆以外には…自らを赦すこと以外には。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『最初は、自由になるためにぼくたちの物語を書こうと思った』

今回、再読してみて、ハンナは、最後まで、ミヒヤエルを囚人のようにしか見られなかったのであり、ミヒヤエルも最後まで囚人のように振る舞うことを望んでいたのではないかと。そんなことを強く思った。

ユダヤ人亡命者で精神分析医エーリッヒ・フロムは『自由からの逃走』で、権威主義の発展形としてのナチズムの根底には、無力な個人のサディズムとマゾヒズムの共依存がある分析した。ナチスの蛮行＝サディズムへの依存は、個人のマゾヒズム＝無力感から生まれる。

ハンナの無力感は、文盲の劣等感に由来していた。

文盲を克服するまでの彼女の人間関係は、無力感をカバーするためにサドマゾ的共依存を前提とせざるを得ない。今回読んでみて、プールで、ミヒヤエルを無表情で眺めるハンナは、収容所の彼女の個室で朗読させた少女を、絶滅収容所に見送る無表情と同じではないかと思った。ハンナは終生、ミヒヤエルを囚人としか見られなかったのではないかと。一方、ミヒヤエルも、実は、朗読マシーンとしての役割のなかで、あくまでも囚人の立場に固執していたのではないかと感じた。ハンナの手紙に返事を書けなかったことは、彼の無意識レベルの囚人根性＝マゾヒズムの顕れであり、それは根本的には彼の無力感に根ざしている。

ハンナが恩赦で出所すれば、二人の関係は、サドマゾ的共依存ではなく、自由を基盤とした新たな関係の創造を強いられる。だが、この二人にとって、共依存関係を解消するのは容易なことではない。彼らは、無力感を克服するまで、自由な人間として成熟していない。

重要なことは、ミヒヤエルの人生には、途方もない無力感があることだ。戦後生まれの彼も、ナチズムに収斂していくような、その無力感の深淵から逃れられない。

なぜハンナは自殺したのか？ 二人が共依存から自由になる再出発を信じられず、自殺したのだ。

無力感は、共依存の温床として現在も猛威をふるいつつある。

(おわり)

(『自由からの逃走』の訳者の日高六郎さんが、2018/6/7 逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343